慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	物価論上に於ける一論争
Sub Title	
Author	小高, 泰雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.1 (1933. 1) ,p.107- 138
JaLC DOI	10.14991/001.19330101-0107
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330101-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投機説が重要な地位を占め、或はこの説を援用する傾きがある。勿論投機は將來の豫測に出發するものであるから、この説を延長すれば心理説となる。今茲では、投機の爲替相場に及ぼす影響、及び前者が後者の運動をして物價に先行せしむる作用の分析は之を姑らく措くが、投機と言ひ心理と言ふも何等の根據なくして行はれるものではない。故に何が此等を釀成するかゞ考究されなければならない。

以上に依つてみれば、既説の實證的研究は、インフレーションの進行と其過程に於ける爲替相場の運動傾向を明かならしむる上に資する所頗る大ではあるが、それにも拘らず、爲替替場決定の直接的原因ではなくて本源的原因に關しては、猶ほ依然推究の余地を殘して居るのである。（完）

附記　本稿は、世界に於ける爲替相場低落の現狀及び其原因を考察し、而して之に關する諸學説に及ぶ豫定であつたが、締切期日の經過のために別稿に於いて取扱ふことゝした。本稿に於ける不備の諸點はその際之を補足したいと思ふ。

物價論上に於ける一論爭

小高泰雄

一

物價は景氣不景氣を表明する一般的指標として、又景氣觀測上の基礎的な事實として重要であることは謂ふ迄もない。カウツキーの謂ふやうに資本主義經濟全體が物價に反映してゐる。今日の樣に世界經濟が錯雜した關係の上に構成せられてゐる場合に於いても、一國の物價を他國の物價に換算することによつて前者の國際的經濟的地位の短期間に於ける一般的狀態並に其の變動の傾向を察知することが出來る。而して物價が全經濟を反映するが故に其の短期間の變動には種々なる要素が原因となつて作用してゐることは爭はれない。即ちその中には自然的原因や社會的原因が種々に動反動して作用してゐる。而してそれ等諸原因中、金の生産上に於ける變動は特に重要なるものとして、從來貨幣學者の間に論述せられてゐる。更に物價運動と景氣運動とが一般的に關聯してゐることからして、恐慌の究極的原因をこゝ即ち金供給の不足に求めてゐる者があることは改めて述べる必要はない。かゝる説明は尙根强く行はれてゐるに拘らず、然も現在の世界不況はかゝる論理を否定する幾多の矛盾を表明してゐることは爭へない。かゝる時機に際して、嘗て一九一〇年頃、當時の物價騰貴に對して、マルクス貨幣理論家の間に、それが金生産と關係あるや否やに就いて爭はれた論爭を紹介することは徒爾ではないと考へる。從來物價の變動を説明する

に當つて如何なる立場がとられてゐたかに就て一言して置かう。

フイッシャーが「貨幣の購買力」中に示した交換方式

$$mv+m'v'=PT$$

はそれ自體としては自明の眞理だと謂へやう。假へこれに對して二・三の餘り重要ならざる流通手段m''v''……を附與する必要があることを認めるとしても。そしてこの方式自體はある一定時に於ける貨幣の購買力を表明してゐるものである。所が今や我々の問題は或一定時に於ける貨幣の購買力より他の時に於ける購買力への變動過程に對する説明である。

フイッシャーのみならず總て物價數量説の立場にあるものは、貨幣の數量に物價決定の究極原因を見出してゐることは一般に知られてゐる。此の説をとるものは流通用具の價値は其の用具の稀少性に依存してゐると見る。そして物價の騰貴を究極するに、流通用具の增減を支配する貨幣用財（主として金）の供給の增減と結び付けて説明する。一般に自由主義經濟學の立場にあるものゝ中に多く此學説の左袒者を見出す。

第二は、物價論上の勞働價値説或は生産費説と稱せられるものである。貨幣價値はこれを構成してゐる財貨（金）の價値によつて決定せられてゐると見るものである。この立場にあるものは、貨幣用財たる金の價値變動は一般の他の財貨の價値變動と變りない。産金上に於ける生産力の發展は、利潤率平均の方則を通して一般の他財貨の價格に作用し貨幣の交換比率即ち貨幣の價格を變化せしめると説く。フイッシャーの交換方式を借ると、mの生産の變化はTの生産との間の資本の分配を變化せしめ、これによつて兩者の供給量を變動せしめて、Pを決定すると見る。

第三は、流通價値説であつて、物價の變動の原因を金生産以外の一般財貨生産の過程の中に求めやうとするもの

である。即ち、物價の變動を貨幣の量にも又、其の材料たる金の價値とも結び附けることなく、一般の財貨生産力の不均衡的發展に關聯せしめて説明する。この種の立場をとるものは一般に、貨幣の量は財貨の流通價値に依存すると見る一方、貨幣價値は産金生産力の變化にも拘らず發券銀行の機通を通して完全に統制せられ、金價値の變動とは何等の關係も存しないと説く。フイッシャーの交換方式をかりるならば、PはTによつて決定され、PTはmの數量を決定すると説明する。

以下に述べ樣うとする論爭は主として前記第二の立場を代表するカウツキー、バウエルと第三の立場を代表するヒルファディング、ヴァルガとの間の論爭である。

この論爭は一九一一年十一月より一九一三年一月に至る "Neue Zeit" (30 Jahrg. Bd. 1, Nr. 7-31 Jahrg. Bd. 1, Nr. 16)に掲載されたものである。最初、オイケン・ヴァルガが當時の物價騰貴を前記第二の立場より論述したオットー・バウエルの著 "Die Feuerung." 1910. に對して前記第三の立場からして寧ろ簡略な批評を同誌に寄せたに對し、ヨットフオン・ゲーが直ちにこれを反駁した。茲に於いて金融資本論の著者ヒルファディングはヴアルガの立場を正當とし、更にこれを補足する意味に於いて「金融資本論」の初葉の貨幣理論を强調縷述した。これに對して、既にこれ以前より物價問題に關心を持ち研究を積んでゐたカウツキーは、バウエルと同じき立場からしてヒルファディングの所論を微に入り細に亘つて批評した。これに次いで更にバウエルは批評たるよりは寧ろ構成的見地からして自説を開陳してカウツキーの所説を補つた。問題の提出者ヴアルカは、これに對して、結局カウツキー、バウエルの謂ふ如き金の物價への影響は分量上全く重要ならざるものであるとして自説を消極的に辯護するに至つた。これに對してカウツキーは更に同誌別刊第十六冊 "Die Wandlungen der Goldproduktion und der wechselnde

Charakter der Feuerung." 1913 (英譯 The high cost of living) を以つて應酬するとともに、自說を組織的に披瀝したのである。

論爭の經緯は以上の樣なものであつた。マルクス理論の權威者の間に釀されたこの論爭より見ても、經濟學上に於いて物價論の難物であることは充分首肯せられるとゝもに、この論爭の內容を明にして置くことは、それが論爭であるが故に多少の無理があることを考慮するとしても尙、物價論の發展上充分に意義あることゝ考へる(註)。

（註）我國に於いて、過般笠信太郎氏が、ノイエ・サイトのこの論爭に關する部分を期日順に飜譯せられ「金と物價」――マルクス主義貨幣論爭――として一九三二年三月出版せられてゐる。尤も同飜譯者には前記カウツキーの最後の一書は載せられてゐない。以下カウツキーの Die Wandlungen ....以外は同譯書を借用し、後書に就いては A. Lewis の英譯 High cost of living に據つて論爭の跡を尋ねることゝした貨。

二

後に意外に大なる波紋を釀成するに至つた、ヴアルガの最初の一小石は如何なるものであつたか。

ヴアルガの一文は前揭のやうに、オットー・バウエルの『物價騰貴論』に對する批評として現はれたものである。乍併それは又、その當時の物價論全體の立場を批評的に取扱つてゐる可成り包括的なものであつた。彼は其の當時の物價騰貴に就いての見解として三個のものを擧げてゐる。第一は物價騰貴を勞働賃銀の上騰の、結果であるとなすもの第二第三は何れも金價値の變動に由來するものとなすのであつて、前者はこれを幣價數量說の立場から、後者はこれを勞働價値說、或は生產費說の立場から解釋してゐるものである。而してヴアルガは此等の諸說を何れも不可なりとして排斥する。

第一說第二說は本論爭には直接の關係を持たないからしてこれに對する批評は省略し、バウエルの主張した第三說に對する批評のみを明にしやう。バウエルは物價騰貴の原因の一つとして、金鑛に於ける金生產費の減少を擧げてゐる。地金の價格減少は自由鑄造の制度を通じて直ちに價格標準の役目をしてゐる金鑄貨の上に移される。貨幣價値の減少は商品の一般的價格騰貴として現はれる。「南アフリカの金鑛に於ける金生產費の減少は、恐らく今日の物價騰貴の原因の一である。今では、金の各個片中に、從來よりも尠い社會的勞働量が體現せられてゐるのであるから、吾々は今日では各商品に對して從前より多くの貨幣を、從前より多くの金を與へなければならない。」(Die Feuerung S. 39.)

マルクス自身も「諸商品價値に變化なきときは價格は貨幣材料たる金それ自體の價値の變化する通りに變化する、....金の價値が下落すれば商品の價値は同一の比例を以つて騰貴し、金の價値が昂騰すれば商品價格は同一の比例を以つて下落する。」(資本論第一卷邦譯八六頁)ことを認めてゐる。

乍併ヴアルガは、資本論全部は（本源的蓄積に關する章を除いて）金の價値に變化のないことを暗默の裡に前提してゐるのであるからして、今日の物價騰貴を直接資本論より說明することは出來ないとする。そして、バウエルとは反對に「金生產に於ける變化は物價騰貴に何等の影響も及ぼさないことを立證し得ると信ずる」(金と物價三頁)のである。マルキシズムの立場からすれば、商品の價値は其の生產方法の變化とゝもに變化する。換言すれば、其の商品が體現してゐる社會的勞働量の變化によつて變化する。故に若しヴアルガにして前述したやうなマルクスの立場即ち「金價値が下落すれば商品の價格が騰貴する」ことを破却しないやうにするが爲めには、金生產には他の一般商品に適應するとは別の價値法則が充當せられる所以を明にしなければならなかつた。然り、彼は金生產に於

ける特殊性を指摘することによつてのみ彼の所謂「立證」の全部を果さんとしてゐる。

「商品の價格は、この商品の生産費を增加しないで思ふまゝに增加せられる場合にのみ、その中に含まれてゐる社會的に必要なる勞働時間によつて決定される。」（上掲書一二頁）これに反して生産費を增すことに依つてのみ始めて從前より多量の生産をなし得る商品の價格は、例へば農産物の場合の如く「最も不利な、地代の出てこない、土地の生産價格が常に規定的市場價格である。」（資本論三卷下、一九七頁）金生産は正にこの後者に屬する。彼は金生産の特殊性を次の如く要約してゐる。

一、金生産に於ては、恰も小麥の生産に於けると同樣に最も不利なる條件の下で生産される金量が價格規定的であつて、それより有利の鑛坑は差額地代を得るであらう。

二、勞働を節約する改良が最も不利なる條件のもとで生産された金の生産費を引下げなかつたこと、從つて、それは金採鑛に於ける差額地代を高め得たに過ぎなかつた。（金と物價一四頁）。

最も不利なる條件の下で生産される金量が價格規定的であることの證明として彼は、「金生産には豫め最大限度の生産費が絶對の嚴格さで與へられてゐる。即ち一キログラムの金の生産費は、一キログラムの鑄造された金の支出に達してはならぬのである。」（上掲書一四頁）と。次にバウエルの謂ふ如き金生産方法の改善は結局に於て差額地代を引上げたに止つたとする主張の背後には、金生産上の生産費は使用せられる生産方法に依存するものではなくして、「何よりも先に、金包含量の豐富さに依存するものである。」（上掲書一五頁）とする考へが存在してゐる。南アフリカに存する若干の金鑛山に於ける配當率を見るに、それは零―六〇〇％の間を激動してゐる。「斯くの如きことは、賣價は一定してゐるが生産費は甚だ動搖してゐる所の、且つ一定の賣價が最も不利なる事情の下で生産された商品量に依つて決定される所の生産部門に限つて可能なことである。」（上掲書一六）又「金商品の生産の場合には競爭は少しもない。新たにヨリ安く生産された地金のキログラムは發券銀行に依つて以前と同じ枚數の金鑄貨で若くはそれに相應した商品で買取られる。數百年來累積してゐる累大な總ての商品に對して一定の交換關係に立つてゐる金量の價格は金の生産費の減少から影響を受けることはない。ヨリ安い生産は、鑛業地代を高める。此處には何等の競爭も存しない。生産費の減少によつて手に入つた利潤は、過剩利潤として鑛山資本家のポケツトに流れ込む。」（上掲書一九頁）然るにこの「過剩利潤は最もよく行つた場合でも世界貿易で流通する商品總量に比すれば極めて小さいもので……商品價格騰貴の原因となることは不可能である。」（上掲書二二頁）然らば金の價格が減少するのは如何なる事情の許に於いてか。それはたゞ「勞働を節約する改良を採用することに依つて、新たに生産された一部分が過剩になる程多量に金が市場に現はれると謂ふ樣な時に限られるだらう。此場合には價格は下落して、最も不利なる事情の下で生産しつゝある一部の鑛山は生産を中止することゝならう。」（上掲書一六頁）然るに斯かる場合は決して起らぬ。總ての國の發券銀行は從來の價格で提供される地金なら幾らでも買入れる。過剩と謂ふことは全くない。從つて價格の下落も亦あり得ぬことである。（上掲書一六頁）

ヴアルガの所論は概ね以上の樣なものであつた。議論の中心は、物價騰貴は金生産方法の變化に依存するものではない。それは金の價値は他の一般商品に現はれる價値法則によつて律せられてゐるのではなくして、農産物に見る如く、最高生産價格に律せられてゐるが故である。而して此の價格は發券銀行によつて永久的に一定せられてゐるからして金價値及び價格の下落は全く起り得ないと謂ふにある。

彼の所論に對して第一に注意を惹かれるのは次の點である。彼は金の價格と、金の價値とを混同しては居ないか。

金が發券銀行によつて一定の價格によつて購入せられ買入價格が不變なる限り金の價格は不變である、と謂ふことは彼の述べてゐる通りではあるが、こゝに判然たらしめて置かなければならぬことは、この場合の價格は、計算單位の客觀的表示としての價格、換言すれば重量關係を基礎とするものであつて、社會的勞働量の規制を受ける他の一般商品の價格と同じき意味に於いて論ぜらるべきではないと謂ふことである。これに反して金の價値と謂ふ場合は、一定量の金の體現してゐる社會的勞働量であつて、其の客觀的表示は商品總價格である。されば金と物價とを考察する限り、金生産に投ぜられた勞働量と、他の商品一般に投ぜられた勞働量との關係を基底して論ずべきで、其の間に、金地金の鑄貨への轉身を介在せしむべきではないのではなからうか。第二に、若し、金地金を鑄造することに左程重要なる意義を認めるならば、金産額が尨大なる增加を示し、發券銀行がこれを無限に需要して而も物價に對して何等の變動をも與へないとしたならば、それは如何なる理論によるものであるかを明にしなければなるまい。

先づ第一の點に對して鋭い批評を放つたものはヨット・フォン・ゲーであつて、第二の點に就いて詳細なる説明を加へて、ヴアルガを辯護したるものはヒルファディングであつた。先ゲーの批評を見やう。

ゲーは同誌に寄せた「金生産と物價の變動」に於いて、先づヴアルガが金生産には一般の價値法則が充當せられないとして其の際擧げてゐる所の一の原因、即ち金鑛山に於ける生産費は『まづ以て、使用せられる生産方法に依存するものではなくして、何よりも先に金包含量の豐富さに』依存してゐるとしてゐるが、價値論に於ては金包含量の豐富さは、全く社會的勞働の一定量を以つて生産せられる金の量として現はれるのであつて、茲に擧げてゐる二つの場合を區別すべき何等の理由もない。マルクス自身農産物の價値構成を論じてゐる際にこの對象を論じてゐるとなす。

次にヴアルガが金生産の特殊的性質の一の根據としてゐる「金價格の不變性」に就て彼は次の如き批評を下してゐる。「金の生産者に對してこゝに（一定量の金の生産費は、同一定量の鑄造せられた金以上に達してはならぬこと、——小高）特別の場合があることは、私には解し難い。こゝで眼を眩してゐる唯一の事情は G—W…W'—G' の過程に於いて、金生産の場合には（マルクスも既に説いたやうに）W' が同時に G' たることである。金生産者にとつては、彼が資本の形式を再び再生産の場合の孤立的に考へられた段階の始めに据えるためには、彼の生産物にもう一度經濟的形式の變化を受けさせる必要はない。しかし、この形式上の特殊性は、價値構成の上に少しも影響を及ぼさない。」（上掲書二九頁）純金一瓦の生産費は五圓以上であつてはならぬ、換言すれば、ヒリッポ・ビッチの所謂「鑄貨品位の割合が貴金屬の價格の對する最大限をなすのである」と謂ふことは、マルクの刻印のある個片の金は粗野な塊の金とは違つたものとするに等しい。同じ權利を以つて十デシリツトルの水は一リツトルの水の重さの最大限度を決定すると云へる。（上掲書三〇頁）ヴアルガは『同じ金屬の鑄貨で測られた場合、金の價格に變化はあり得ぬ』と謂ふマルクスの言葉を引用してゐるに拘らず、次の樣に謂ふ場合には完全に誤謬に陷つてゐる。即ち「金商品の生産には競爭は存しない。新たにヨリ安く生産された地金のキログラムは、以前と同じだけの枚數の金貨で、若しくはそれに相當した商品で、發券銀行に買取られる」と述べてゐる時は、『同じ枚數の金貨』と『若しくはそれに相當した商品』との二つの異る場合を同一主張の證據だと稱してゐる。この二つの場合を全く異つたものとして取扱つてのみ金の價値變動は認識出來るのである。要するにゲーの批評は、ヴアルガが金の價値及び價格を判然たらしめてゐない點に主とし向けられてゐると謂へやう。勿論他の二三點に就いても批評してはゐるけれども、それ等は、

後段にカウツキーが同じ視角から一層詳細な批評を試みてゐるから、その際に述べることゝしやう。

三

ヒルファディングはヴアルガが前掲の論文で辯護してゐる所のテーゼ「金生産の變化は物價騰貴の原因たり得ない。」を原則として承認し、「ヴアルガの論證を決定的ならしめる爲には、尙ほ一つの本質的な補足を要する」と云ふ見地から一文「貨幣と商品」をノヰエ・ツアイト誌に寄せた。

彼が以つて本質的補足を要するとなした點は、前にも指摘した通り、金に對する無限の需要は如何にして生じ且つ、如何なる意義を有するかの點である。

彼は先づ金の價格を次の樣に規定する。普通用ひられる「金價格（ゴールド・プライス）」の表現たる一マルクは $\frac{1}{1395}$ ポンドの金（一ポンドは一三九五マルクに鑄造せられるが故に）に等しとせられるのは、重量の表現であつて價格の表現ではない。價格表現とは、10マルクの金＝aメートルのリヤネヤ、bキログラムの鹽、c勞働の手綴、……に於て與へられる。そこで「ヴアルガの主張は、鹽やリンネルの生產費が不變であると假定すれば、十マルクの金は其の生產費の如何に拘らず、常に、aメートルのリンネル、bキログラムの鹽、……と交換せられると云ふに歸着する。」（上揭書三八頁）この說は一見如何なる價格論とも矛盾するやうではあるが、金は其の價格構成に於いて地代の法則が決定的に作用する商品に屬するからであるとしてヴアルガの說を是認してゐる。然らば、金の價格が下落するのは如何なる場合に於いてか、ヴアルガはこれに應へて「金の市價が下落する場合はたゞ、勞働を節約する改良を採用することによつて、新に生產されたその一部分が過剩になるほど多量に金が市場に現はれるといふ樣な時に限られるだらう。……然るにこんな場合は決して起らないのである。總ての國の發券銀行は從來の價格で提供される地金なら幾らでも買入れる。過剩といふことは全くない。」（上揭書一六頁）即ち金に對する無限の需要が金價格の低下に對する損抔となつてゐる。而してヒルファディングは一層進んでかゝる無限の需要は、重量關係としての「金價格」と彼の所謂金の價格表現との一致を招來するが爲めの貨幣制度から必然的に生じ來るものなることを說明せんとするのである。

彼に據れば、金は一定の固有價値を持つてゐる。從て、自由鑄造金本位制度の下に於いて使用せられてゐる貨幣量言換すれば金鑄貨も亦固有價値を持つてゐると謂へる。然らば事實上流通の目的で行使されてゐる貨幣の價値は何によつて決定せられてゐるかと云ふに、それは、自由鑄造禁止制又は紙幣本位制の場合と同樣に次の價値方程式による。

$$\text{貨幣商品の價値} = \frac{\text{商品の價値}}{\text{貨幣の流通速度}} + (\text{流通支拂の總計} - \text{(相殺される支拂)} - \text{(同一貨幣個片が數時は流通用與さして}$$
$$\text{數時は支拂用與さして作用する總數)})$$

約言すれば「貨幣の價値は『流通價値』によつて決定される。」（上揭書三九頁）のである。乍併、金本位制の下では、「金の量がその固有價値を（一般財貨に對する固有の交換比率と解すべきか――小高）持つてゐるが故に、流通價値は、流通界に現はるべき金個片の量に對してのみ決定的なものである。」（上揭書四〇頁）彼の示してゐる例に據ると、自由鑄造金本位制の場合に於て「いま社會の處分する金量が二〇〇〇だと假定する。若し流通價値が一〇〇〇に等しいならば、一〇〇〇だけの價値ある金の個片が流通して、一〇〇〇は退然として保存せられる。……自由鑄造禁止制又は紙幣本位制のときには貨幣量が與へられたものであつて、其の價値は流通せる商品の價値總量によつて決定されるが、金本位制の場合には、金の固有價値は與へられてゐて、貨幣量が流通價値によつて決定されるのである。」（上揭書四〇―四一頁）との煩はしい迂回的說明は次の樣に解釋し得るであらう。流通場裡に存する貨幣の購買

力は貨幣の流通價値（前掲價値方程式の右邊）によつて決定される。乍併、貨幣が金鑄貨なる場合には、そは金は固有の購買力を有することによつて、同樣に各金貨の個片は固有の購買力を有してゐる。されば、金本位制の下に於ては、かゝる價値方程式の充當は實質的には流通金個片の量的關係の變化を通してのみ現はれる。

彼は更に續けて、流通金鑄貨の個片の量を流通價値に應じて增減することは、流通金貨の價値を一定に保持することゝなり、從つて、こゝでは價値比率に於ける變化は全然成立しない。「何故かと云ふに金の價値に變化が起り得る爲めには、金が流通界の中に固着してゐなければならないからである。と云ふのは、商品と流通用具とが直接に對立せられるときにのみ、兩者相互に其の價値が決定され得るからである。流通界の外にある貨幣――銀行の窖の中に退藏となつてゐる貨幣は、流通商品總量に對しては少しも關係がないからである。故に事實上の過程はかうである。金の生產者は一キログラムの金と引換へに一キログラムの金鑄貨を受取る。新しい金は銀行の地下室に作んでゐる。流通界の入用が增大して來ると、金は地下室を出でゝ流通界へと流れ込む。だから、金鑄貨と商品との交換比率は常にこの行程の始めの場合と同一である。この機構が害はれない限り、金生產に於ける變化はこの比率に少しの影響をも與へない。が、もし、この機構にして止揚されるならば、この比率は變化することゝならう。」（上掲書四二頁）而してこゝに謂ふ所の機構は、金の交換比率を不斷に一定に保存せんとする所の中央銀行或は發券銀行の統制的作業一般を指してゐると見ることが出來る。かゝる統制的作業を有効に遂行する最も主要なる基底となるものは、常に多額の退藏金貨或は金を保有することである。斯くしてこゝに金に對する無限の需要は其の基礎を與へられることゝなる。

ヴァルガに於いては既に示したやうに金需要に無限性があるが爲めに金の供給の一部分が過剩となる程市場に現はれて市價の下落を生ぜしめることはないと說かれてゐる。然るにヒルファディングは實際に於いて金の需要は無限ではあるが、よし金の生產增加が迅速で、銀行が有する金退藏額が急激に增加して總ての目的を十分に滿し得る場合に一定の期間金の受領が拒絕せられる如きことがあるにしても、貨幣價値に、何等の變動を及ぼすことはない。何故なら銀行は流通其のものを從來通りに統制し、總ての鑄造貨幣を流通より引揚げ、また必要に應じては鑄貨を退藏の中より提供するであらうからして既に鑄造されてゐる金の交換比率には變化は起らない。故に金需要の無限性は金の貨幣としての價値を不變ならしめる絕對的條件ではない。乍併、商品として奢侈や工業上の目的に需要される金の供給が激增すれば、金の價格は低落し、不利なる事情の下で生產しつゝある金鑛山は生產中止を餘儀なくされる。故に金の尨大なる生產增加は貨幣價値を下落せしめないが、金の價値を下落せしめる可能性がある。若しこの可能性が現實的のものとなるならばそは彼が最初に與へてゐる前提たる「金は固有價値を有する」を覆す處となるは一見明である。彼はこの危險を防止するがためには飽くまで金需要の無限性を絕對的のものとして金價値の變動の生じない所以を證明しなければならない。かゝる證明の論據として持ち來つたものは、中央銀行の金退藏はたゞに流通に對する準備は貨幣請求權の金兌換に對する――可能的なものに過ぎないが――保證たるに止まらず、また何時でも交換出來る形態になつてゐる所の國際貸借差額決濟の爲めには金はたゞその金屬價値によつてのみ通用する。從つて「自由ある、謂ふ迄もなく國際的貸借差額の決濟の爲めには金はたゞその金屬價値によつてのみ通用する。從つて「自由鑄造が禁止された場合に起るやうに、もし金屬價値がその鑄貨價値から離れるならば銀行の退藏は、それが國際的支拂殘高の決濟に使用される限り、價値下落を來たすことがあり得る筈である。たゞこゝに、貨幣流通に對して唯一の統一的經濟領域を創り出すところの、本位制の國際的統制があるとすれば、それのみが斯かる結果を防止する

かも知れない。乍併、國際的統制なるものは、國民的國家的な反對にぶつかる。よし斯かる國際的協定が戰爭前にうまく行くとしても、一朝戰爭狀態に入れば破られるに違ひない。これ、何故に、金に對する無限の需要に變化の起ることが先づ無いものと見られなければならないかの理由である。」（上掲書四四―四五頁）

彼の所說を要約して見ると、金は固有の價値を持つてゐる。それは、金が常に一定の價格で買取られることを前提としてゐる。金の固有價値と流通してゐる金鑄貨量の價値とを一定せしむる爲めには、流通金鑄貨量を流通價格に應じて增減せしめることを要する。この事の爲めには銀行は不斷に多分の金退藏を有することを要し、これが金に對する需要の無限性を形成する主因である。更に又需要の無限性を保證する他の要因は金退藏が國際的貸借決濟手段としての役立つことにある。されば金需要の無限性の意義は一面に於いて金價値を固定せしめるとゝもに、他面流通貨幣量を伸縮することによつて貨幣の商品に對する交換比率を固定せしむるにある。斯樣な彼の理論は次の一例の中に最もよく要約せられてゐる。「こゝに國家の權力が、完全に封鎖された自足經濟の中で、石油販賣の獨占をやり出すとする。國家權力は、例へば一〇、〇〇〇萬リツトルの貯藏をいつも持つてゐるとしやう。國家は石油百リツトルを三〇マルクの價格で各人に賣り、二九・五マルクの價格で彼に供給された總ての石油を買ふものとしやう。この結果は云ふまでもなく、石油の價格が常に三〇マルクといふことにならう。この價格は、どの產地が猶ほ採掘に叶ふか、どの產地が地代を齎すであらうか、その地代はどれだけの高さであらうかを決定することゝならう。石油需要が增加した場合には、其の需要は「石油銀行の政策」上それだけの大いさで事足るとされてゐる所の貯藏のうちから賄はれる。需要の方が追付かぬか、もしくは特に生產の方が豐かになるならば、この貯藏は更に增大してくるわけであるが、これは銀行當局にとつて殊に好都合な狀態だと考へられるであらう。金の場合も、事柄は全く似通つてゐる。」（上掲書四五―四六頁）

ヒルファディングの所說に於ては前述した所から直ちに解る樣に、金の價値・貨幣の價値維持に對して最大の影響を及ぼす力は、國家的權力即ち流通の國家的統制力に外ならぬ。而して、國家の行ふ退藏及び發行によつて貨幣と商品との交換比率が一定不變に維持せられるならば、それでは本來の交換比率は一體どうして出來たものかと謂ふ問題が殘る。彼はこの交換比率を以つて、「流通に如何なる社會的統制もなくして金がまだ流通界に入込んでゐた時代に、歷史的に構成せられたものである。」（上掲書四九頁）然して此の當時に於いては金は決して無限の需要を持つてゐるものではなかつた。金は兎も角も商品と交換されなければならなかつた。故に直接流通界に入り込み、そして個人の退藏形成に這入らない限りは、其處に止つてゐたのである。この當時の退藏の主要を形態は戰爭を目標とする國家の退藏である。然してこれと同時に、この集積された退藏が、週期的に幾度も幾度もあらゆる種類の戰爭費用の支拂として流通界へ吐き出され、次で其の大部分が流通界に殘留したことを意味し、先づ流通界の中で金と商品とが現實に對立してゐることに依つて、金の交換比率が再三再四作り直されて遂に現在の如き比率を構成するに至つたのである。故に、此當時に於いて金の價値は、一方に於いて流通界の絕へざる攪亂から、他に於いて金の生產費に於ける變動から、不斷に變動してゐたのである。されば、ヒルファディングは國家的統制による退藏、流通と、この統制が存しない場合に於いて生ずる個人的退藏と流通とは全く別の方則に支配されるのであるとする。前者に於いては流通價値に適應する所の金鑄貨量を維持することによつて貨幣の價値を一定し、金の固有價値を形成せしむる目的を以つて、約言すれば、流通に對する準備たらしめる目的を以つてせられるに反し、後者に於いては貨幣の退藏は單に自己の支拂能力に對する準備、將來の生產に對する保證の形態で起るのである。されば、

そは全然流通の準備たるの意義を有するものではなく、流通價値如何とは全然關係がない。（上掲書五〇頁）

斯くしてヒルファディングに於いては、國家的統制に依る金需要の無限性は、一面に於いて金の價値及金鑄貨の價値を安定せしむると、もに、他面に於いて金の生産費に生じたる何等の變化も金鑄貨の價値即ち商品に對する交換比率を變化するものたらしめない意義を有することゝなるのである。

四

次でカウツキーは同誌に寄せたる「金・貨幣及び商品」を以つて、ヒルファディングの所説を微に入り細に渉つて批評した。上述の如くヒルファディングは紙幣本位制或は自由鑄造禁止制の下に於ける價値方程式を自由鑄造金本位制にも應用し、金に對する需要の無限性を附與することによつて、兩者間に本質的區別の存してゐないことを確めた。これによつて、彼はヴアルガの所論を一層完全なるものたらしめやうとした。乍併彼の立場は一見して明なる如く、金の價値によつて貨幣の價値が決定せられることを全然拒否しやうとするものであるからして、兩者間に斯樣な關係の存在することを主張するカウツキーにとつては倒底認承し難い所であつた。カウツキーは其の當時の物價騰貴の原因を以つて、一部分は金生産の變革による金價値の低下從つて貨幣價値の低下の度合が生活資料の價値よりも迅速であつたことによるものなりとして、價値に於いて金と貨幣との間に因果關係の存することを認めるものであつた。（註一）

註一　勿論彼は當時の物價騰貴を金生産の變革以外に、ロシアやアメリカに於ける濫耕、生産者と商人との結合が益々多くなつたこと、並びに保護關税の引上げ、租税の增加等に歸してゐる。（金と物價、六四頁）

カウツキーの批評は二部に分かれてゐる。一は紙幣本位論或は流通價値論　二は、金の價値と銀行であつて、特に金需要の無限性に關するものである。

第一部の流通價値論に對する批評の根據をなしてゐるものはヒルファディングに於いては價値と價格とが同一視せられ或は混同せられてゐるからして、結極彼の立場は彼自身が攻擊してゐる貨幣數量說の跡を不知不識追ふことを餘儀なくされてゐると謂ふにある。ヒルファディングの流通價値論は、其の好著「金融資本論」中に精しく述べられてゐる。而して、流通價値に關する問題は、寧ろ本論爭の中心をそれてゐるやうだけれども而も、ヒルファディングのヴァルガ辯護論の根據をなしてゐるものだから以下カウツキーの批評を採錄した。

ヒルファディングは前揭のやうに紙幣本位制或は自由鑄造禁止制の下に於ては貨幣の價値は其の金屬貨幣たる金の價値には何等決定せられることなく、流通價値によつて決定せられるとなした。流通價値は商品價値總額を貨幣の流通速度を以つて除したるものであつた。彼の說明は斯うである。今ある社會に於いて一瞬間に、五百萬マルクの商品が五百萬マルクの貨幣に交換せられ、次いで五百萬マルクの他の商品と交換せられるが爲めには、謂ふ迄もなく五百萬マルクの貨幣を即ち約三六〇〇ポンドの金を必要とする。所が今、「金を紙の證券で置き代へるならば、この證券には何とでも印刷出來る譯だが其の總量は常に商品の價値總額を代表せねばならぬ。從つて我々の場合には五百萬マルクに等しくなければならぬ。」例へば「同し紙片が五千枚印刷されるならば各紙片は一千マルクに等しくなるし、十萬枚印刷されるならば、各紙片は五十マルクに等しくなる。」即ち各紙片に如何樣の額が印刷されても其の價値は社會的に必要なる流通價値即ち（商品の價値總額＋（滿期に達した支拂の總額）－（相殺せられる支拂額）－（同一貨幣個片が或る時は支拂手段或る時は流通用具として作用する循環度數）によつて決定される。（Hilferding "Das Finanzkapital." 邦譯三〇—三三頁、四八頁參照）故に紙幣は金の價値から獨立してゐて、紙幣が代表すると

ころの價値總量は、直接これに對立せる商品量の價値によつて決定される。

カウツキーは先づ、ヒルファディングに於ては、五百マルクの商品の流通を以つて流通價値を換言すれば商品の價値總量（速流速度を慮外すると）を意味せしめやうとしてゐるが、こゝに彼の貨幣理論の全構成の誤謬の根幹が存してゐると見る。價値は社會的必要勞働時間によつて決定せられてゐるからして、貨幣或は金との關係なくして考へ得られることは言を待たぬ。而し「五百マルクの商品」の表現は、金によつて測定せられた商品價値總量を表明するものであつて、決して商品價値自體の總量を表明するものではない。他面ヒルファディングの謂ふ、商品價値によつて決定せられる所の紙幣の價値なるものは何か。マルクスも述べてゐるやうに「無價値のマルクが價値證券たり得るのは、たゞそれが流通過程の內部で金を代表してゐる限りに於てである。」（經濟學批判、一三頁）紙幣は金代表證券として初めて價値證券たり得るのであつて、商品の價値を代表するものではない。斯くして流通の內部に於いては、一方に金を代表する證券たる紙幣總量と、他方に金によつて測定せられた商品價格總量とが對立し、茲に於いて、「商品の價格總額によつて現に循環してゐる紙幣の價値が決定せられる。」（「金と物價」七九頁）さればマルクスが資本論に於いて述べてゐる如く、金の價値が與へられてゐる場合には流通用具の量は、商品の實現さるべき價格總額に依つて決定されるのである。即ち「マルクスに於てはこの過程が金によつて媒介されてゐる。」（上掲書七七頁）然るにヒルファディングに於いては、價格と價値とを同一視することによつて金の斯かる媒介を不要なりとする。彼は「金融資本論」に於いて、「マルクスの採つたこの廻り道（金の媒介——小高）は無用としか思はれぬ。かゝる決定の純社會學的性質は、紙幣の價値を直接に社會的流通價値から導き出す方が遙に明白に現はれる。歷史的には紙幣本位制が金屬本位制から起つたと謂ふことは、敢てこれを理論的にも斯く見ねばならぬといふ根據にはならぬ。紙幣の價値は金屬貨幣を引合に出すことなしに導き出されることが出來ねばならぬ。」（Das Finanz-Kapital. 七一頁）

ヒルファディングの斯かる前提に據れば、流通界には、恐らくは五百萬勞働時間を代表してゐる商品の一群、及び『同一額面』の紙幣の量とが對立してゐる。紙幣はそれ自體無價値であるが國家の流通手段としての獨占に依つて價値を受取ることゝなる。一見してこれは架空なる勞働貨幣の拙い模放以外のものではない。（上掲書八二—八三頁）併し勞働貨幣が商品生產社會の本質と相容れないことはマルクスが既に指摘してゐる。

「例へば一枚の紙幣によつて、x勞働時間が代表されると謂ふやうに、なぜ貨幣が直接に勞働時間それ自身を代表しないかといふ問題は、つまり、何故に商品生產の基礎の上では勞働生產物が商品として表現されねばならないかといふ問題に簡單に歸着する。と云ふのは、勞働生產物がかく商品として表現されるといふことの中に勞働生產物が商品と貨幣とに二重化することが含まれてゐるからである。」（資本論第一卷五九頁）ヒルファディングは勞働時間の代りにマルクを代入することによつて、此の問題に必然的に觸れることを廻避してゐる。

扨で、ヒルファディングが最初に扱つてゐる五百萬マルクの商品價値とは何か。それは觀念された金の一定量の大さである。丁度三六〇〇ポンドに當る所の。今この三六〇〇ポンドはそれを代表する紙片で置き換へ得るならば、この紙片の量が如何に大きくともそれは三六〇〇ポンドを表彰する以外のものではない。若し同一額のものが五千枚印刷されゝば各紙片は一千マルクに等しくなるし、十萬枚印刷されゝば、各紙片は五〇マルクに等しくなる。而して、紙片の價値は商品の價格總額によつて決定せられるからして、我々は、紙の百マルクが金の五〇マルクのみ

の價値しかない場合の生することを考へ得る。即ち紙幣價値と、金價格との二重の價格が出來上る。乍併價値決定の基礎は常に金に在る。金は價値尺度として排除され得ない。（上掲書八七―八六頁）然るにヒルファディングに於ては、貨幣の價値が確立する以前に如何にして商品の價格に達するかてう基本問題を顧慮することなく、商品は流通界に一定價値のみでなく、未だ全然價値の知られてゐない貨幣との一定の交換比率即ち價格を持つてゐるものとして現はれ、この商品の價格總額が基礎となつて反對に貨幣の價値が決定せられてゐる。（前掲價値方程式參照）

「マルクスは、かの『商品は價格を持たずに流通行程に入り、然る後、そこで、商品の雜炊（ワーレンブライ）の一可除部分が金屬の山の一可除部分と交換される』と考へてゐるところの『馬鹿々々しい』數量說の代表者達を嘲つてゐる。……この批難こそ彼の社會的流通價値說にも當嵌るものではあるまいか？　なぜなら、彼の場合にも、貨幣は價値を持たずに流通界に這入つてくるのだから。成程、彼は價格を持てる商品を流通界に這入らせる。だが彼のこの事をなし得るのは、たゞ彼が商品の價値をすぐさま又その價格として示したからに過ぎない。」（前掲書九六頁）

五

次にカウツキーは論爭の本題に這入る。ヒルファディングは上掲の紙幣本位制度下の原則を移して金本位制度に適應した。其の結果、流通價値が貨幣價値を決定する方式は、貨幣の數量の決定することによつて實現される。發券銀行は「無限に金を需要する。」ことによつて、流通貨幣量と流通價値とを一致せしめる。從つて貨幣商品間の價値比率に變化はない。同時に金の價値にも變化はない。金價値の變化は金と商品とが流通界にて直接に對立することによつてのみ可能である。然るに今日では發券銀行が無限に金を確定價格で買入ることによつて、そは不可能である。從つて當時の物價騰貴は金價値下落の結果ではない。ヒルファディングの所論は概ね以上のやうなものであつた。

故に問題の中心はヒルファディングが解してゐる金の需要の無限性の本質を究明することである。

ヒルファディングに從へば金需要の無限性は發券銀行の設立後に成立した。發券銀行の設立は、「これは先づ一キログラムの金に對して、常に、金鑄貨の一キログラムが與へられるてふこと以外のことを意味しない。この新しいキログラムは、先づ銀行の地下室の中に姿を隱し、其處で退藏として保護される。」カウツキーは謂ふ「若しヒルファディングにして金一クローネを受取り、これと引換に十マルク紙幣を與へるならば彼は退藏として貯蓄し得る『新しい金』を得たとは信じないであらう。彼の退藏は以前と全く同じ大さに止まり、たゞ其の形態を變へたに過ぎない。」（金と物價、一〇五頁）銀行が、金一キログラムに對して鑄貨一キログラムを與へることは、金を他の貨幣形態に兩替するに外ならぬ。兩替店は彼の兩替する貨幣に對して需要を表はしてゐるのだとは何人も主張しない。又、銀行が貨幣指圖證を以つて兩替するときは、明に金は新に退藏額中に加へられる。この過程を以つて銀行は市場に於ける總ての金を引揚げ得る。銀行の地下室に集積した金は事實上指圖證を持つてゐるものゝ所有に屬する。故にそれは指圖證の呈示せられた時兌換せられることを要する。斯樣に考へ來ると、增加したる金退藏額は貨幣指圖證即ち銀行券の所持人の預金である。されば銀行が、新金に對して金鑄貨或は指圖證を與へ、この行程を無限に繼續するとしても、それは、銀行が、金を他の貨幣形態に兩替してやるか、或は金を預金として受取るか、孰れかの無限の務め（ベライトヴィリヒカイー）心を表明するに過きぬ。かくして金に對する無限の需要の假面は剝がれる。

發券銀行の設立によつて、嘗ては多數の金庫や地下室に散在的に退藏せられてゐたものが、今や一箇所に組織的に大規模に集められはしたが、それだからと云つて、ヒルファディングが謂ふ所の「流通の社會的統制」が銀行の設

立によつて、金の無限の需要を通して、新に發生したものではない。第一にヒルファディングの示してゐる所を見るに、銀行は金を受領し、流通界の入用か之を誘致する時、始めて金を支出する。個人退藏の場合に於いては、「金は兎も角も商品と交換されねばならなかつたから、直接流通界に入込み、そして個人の退藏形成に這入らない限りは、其處に止つてゐたのである。だがこれとても流通入用に依存してゐるのではなく　かゝる退藏形成に至る個人々々の私的能力に依存してゐたのである。」されば銀行の設立は事情を本質的に變化せしめた。カウツキーはこれに對して、「何故に以前に於いては金が生産せられると直ぐに商品と交換せられねばならぬかは瞭明ではない……之と反對に、今日の金生産者が直ぐ樣その金を商品に交換しないと謂ふ理由は少しもない。」（上掲書一〇八頁）事實、今日金生産者は生産した金を金鑄貨或指圖證に兩替するのは、生産財或は消費財を購入する爲めである。而してかゝる購入は、それが嘗て發券銀行設立以前に於いて個人的な貨幣所有者の欲望と能力とに依存してゐたと同樣に、今日に於ても、銀行の肆意に依存するものではないと論駁してゐる。第二に、ヒルファディングは銀行退藏は流通の準備に資せられ、何處で現はれた流通入用をも直に充足する義務を負はされてゐるに反し、個人にとつては流通入用即ち金の價値が商品との交換の際に騰貴するとしても、そは貨幣を流通界に投ずる理由とはならぬと論じてゐるに對し、カウツキーは流通入用に從つて個人が貨幣を流通界に投下してゐることは今も昔も同じであつて、銀行の設立によつて變化せられはしないとする。ヒルファディングは次の樣に說く。即ち流通價値が一、〇〇〇から一、五〇〇に騰つた場合に、若し少しの金退藏のない場合は一マルクは今や一・五マルクとなつて、金鑄貨の交換比率は變化することゝならう。反對の場合には反對のことが起る。と。ヒルファディングの所說によると、宛も銀行の存してゐない場合には、實質價値の上騰してゐる貨幣がそのまゝ流通場裡に殘らねばならぬ如くに考へしめる。然るに貨幣の爆解や退藏によつて銀行のない場合にもかゝる事實の起つて來ないのが當然である。換言すれば各個人は流通入用に應じて或は退藏し、或は流通界に投じてゐるのであつて、決してそは銀行の創造によるものではない。彼は、更に個人が貨幣の流通に對して主響的立場にあることを次の樣に强調する。個人が商品を買ふことは前述したやうに消費者及生産者としての彼の欲望及び其の所有する貨幣量に依存してゐる。「退藏として所有する貨幣量が家計の爲め若くは營業の爲めに、或はその他の爲めに、必要な買物をするに足らぬ場合には澤山な退藏をやつてゐる他人から自分の信用をもとでに貨幣を借らうと努めねばならぬ。個人の貨幣を以つてこそ、流通は營まれる。」（上掲書一一〇頁）發券銀行の設立はこの間の事情を何等本質的に變更してはゐない。變つたのは單に其の種類に外ならぬ。即ち茲では個人所有の貨幣の部分が銀行預金の形態をとり、支拂は銀行を通して行はれ、信用需要に對しても、銀行を通して行はれる。縮言すれば個人への支拂と貸付を通してのみ銀行は貨幣を流通界に投ずるのである。「依然として我々は、商品流通の從つて又これによつて制約されてゐる所の貨幣循環の社會的統制を毫も持つてゐない。個人を動かすものは依然として個人の欲望と能力である。」成る程、銀行の設立によつて多くの流通上の障碍は克服し得たけれども「商品の流通行程は總體的生産行程のたゞ一部分に過ぎないし。後者の要求と、結果とに依つて規定される。この總過程に對して生産手段上の私有財産制が未だ適用を失はぬ限りは、この過程の一部分に對しても、亦社會的統制を語り得ないのである。

以上カウツキーの批評は第一部に於いてはヒルファディングが、マルクスの正當にも歩んだ價値から價値への廻り道を省略することによつて生じた誤謬を指摘することに依り、第二部に於いては、ヒルファディングに於いて認められたる如き「金の需要の無限性」は、發券銀行設立の前後の別なく、何等社會的統制上の意義を持つて居らぬことを

指摘することによつて、物價騰貴と、金生産の無關係を主張する學說の誤謬を明にせんとしたのである。勿論こゝには何等彼の構成的意見は披瀝されてはゐない。それは、後に示す如く、彼の High cost of Living 中に見出される。

六

次で、カウツキーの所論を補足する意味を以つて、「金生産が商品價格に及ぼす影響を」寧ろ構成的見地から論じたバウエルの「金生産と物價騰貴」が同誌上に現はれた。

彼は金が一般財貨と何等本質的に區別せらるべきではなく、從つて、一般商品の生産費と價格との關係を律してゐる諸法則は本質的には何等變化する所なく金の生産費と其の價格の關係に妥當する所以を明にしてゐる。唯金が一般的等價物としての機能に附隨して他の商品と異つた特殊的表現を示してゐるに過ぎないと見る。商品の生産費と價格に關する諸法則を彼は次の樣に規定してゐる。一、社會的生産の一部門に於ける生産費の低減は、種々なる生産部門への資本の分配を變更する。二、この爲め、生産費の低下した生産部門の供給は急速に增加し、他の總ての部門のそれは緩漫となる。三、其の結果、前者の價格は下落し、後者は騰貴する。約言すればかゝる價格運動は「種々なる生産領域への資本の分配に依つて、これらの領域に於ける平均利潤を同一ならしめ、次で、價値を生産價格に轉化せしめるやうな需給關係が生じて來るからである。」（資本論第三卷一七六頁）

此法則は金生産に妥當する。金鑛山に於ける新機械採用の結果、平均利潤率以上の利潤が得られる場合には、個々の生産部門への社會的資本の分配が變更される。このことは他の商品生産部門への剩餘價値の資本化の割合の減少として、從つて其の供給量增加の割合の減少として現はれる。他面金生産者の商品需要量は增加するのは當然である。故に商品價格は騰貴する。金以外の商品生産に於いて現はれる所と異る所は、こゝでは、商品價格が一般に騰貴することゝ、金生産が社會的總資本を自分のところに引寄せるために、總資本の上での全商品生産の割前が低減されることゝである。（金と物價一三九―一四〇頁）かゝる過程を基礎として、商品生産內部に於いて物價を騰貴せしめる情勢が發展する。金生産に於ける生産費の低下から生じた價格の上昇は一般商品の利潤率を上騰せしめる。其の結果は工業部門の擴大となり、原料や生活資料への需要の增加となつて物價を煽る。他面資本家は、自分の資本を一層有利に利用するのみではなく、新資本の一層大なる額を自己の生産部門に投じやうとする。而してこの事は銀行の金退藏の增加に基づく信用の膨脹と、物價騰貴による蓄積餘剩價値量の增大によつて可能となる。總ては物價騰貴・好景氣への機緣である。然るにかゝる物價騰貴は商品生産者の利潤率を上騰せしめる。然るにこの傾向は、それ自體の發展を抑制する反對現象を惹起する。即ち商品生産の總資本の有機的構成度の高められることゝ、金生産に於ける生産費の增加によつてである。詳言すれば商品價格の騰貴と賃銀の增加率とは一致しないからして、勞働者の生活が脅される。而して賃銀値上に對する勞働者の要求の貫徹される主要部門は資本の有機的構成度の低い部門である。この事實は、資本の新規分配を有機的構成度の高い產業に有利にする。從つて社會的平均的資本の有機的組織は高まり、利潤率騰貴の限界を定めることゝなる。他面金採鑛の利潤率も低下する。何よりも先づ、商品價格の一般的騰貴による生産要具及び勞働力に對する費用の增加によつて生産費は增加する。そこで全體の經過は次の樣になる。金生産費の低下によつて生じ來つた資本の新なる分配は、一方に於て、商品價格を高めることによつて商品生産に於ける利潤率を高くし、他方に於ては、其の生産費を高めることによつて金生産に於ける利潤率を低くする。其の結果は金と商品とが再び生産價格の比率で交換せられることゝなる。

かゝる立場からして彼がヴアルガやヒルファディングの所說に對して採つた態度は自から明である。尤も彼がこの

兩者に對してなしてゐる批評は單に立場の相異を表明した概括的なものである。即ちヴアルガに對しては彼が「金生產には競爭の存しない」と述べてゐる命題の全然不當であることを指摘することにより、ヒルファディングに對しては、金の價値は金が流通界に固定して商品と對立する時にのみ變更せられるとなす命題に反駁して、總ての金生產額は直接に流通界に於て需要として現はれ、從つて斯くの如く區別することの全然無意義なるを指摘することによつてである。（上揭書、一四一―一六一頁）

マルクスが商品の價格運動に就て與へた法則をそのまゝ金に應用し來つた彼の理論は、如何にも單純であり、且つ明瞭である。乍併、今や論爭の中心問題となつてゐる一九〇〇年初葉に於ける物價騰貴が果して其の理論を以つて證明せられるかどうかが寧ろ重要な課題でなければならぬ。バウエルは其の理論の正當性を支持するが爲めには其の當時の事情が彼の謂ふ如く變動してゐたことを說明しなければならなかつた。換言すれば、資本の新規の分配は彼の理論通りに變更されたかどうか、又金生產の變化が果して一般物價の最初の變動を齎す程大なるものであつたかどうかを實證的に示すことが必要であつた。にも拘らず彼は何等これに就て論及する所はなかつた。而して反對論者は正にこの點からして鋭く批評し來つたのである。

先づスペクタートルは同誌に寄せたる「金生產と物價騰貴の問題に就て」に於て、基本的に前揭のヴアルガの所說を承認して、金生產に於ける技術的變化は單に鑛山地代を變動せしめたに過ぎないのであつて、何等平均利潤率に影響する所なく、從て資本の移動とは獨立してゐる所以を强調し、バウエルに據れば當時金生產部門への資本投下が增大すべきであるに拘らずかゝる傾向は認められぬ。「W. Ruppel『倫敦取引所に於ける鑛山株取引』（イェナ、一九〇九）に從へば、倫敦に於て一九〇一―一九〇七年間に鑛山に投資された資本總額は左表のやうである。（但し

（公稱資本）

	金鑛山	一般鑛山
一九〇一	二、八六〇	八、七五〇
一九〇二	三、八一〇	一四、〇七〇
一九〇三	三、二八〇	七、六三〇
一九〇四	二、二三〇	六、六五〇
一九〇五	二、〇〇〇	八、六八〇
一九〇六	一、八九〇	五、九二〇
一九〇七	七一〇	二、九四〇

單位百萬磅

鑛業が吸收した總資本の上での金鑛山資本の割前が次第に減少してゆく。故に、金採鑛に於ける技術的進步の結果として資本の分配に大きな動搖は起らなかつた譯である。從つて金採鑛に於ける事情は他の商品の價格に影響することは出來ない。（金と物價、一七二頁）更に又「いま投下された資本が金鑛山及び（一般の）採鑛に於て生產された價値に對して一定の關係に立つとして置く。金生產物の價格は一八九六―一九一〇年間に一二五％騰つてゐる。然るに同じ期間に、鑛業生產物の價値は獨逸では八、六七〇萬マルクより二〇〇、八六〇萬マルク（即ち一五〇％以上增加し、合衆國では……約三倍に增加してゐる。」（上揭書一七二頁）は共にバウエルの所說が原則通りに適應せられてゐない所以を示すものである。

次にヴアルガは「金生産と物價騰貴」に於て更に廣汎なる實證的材料を以つて、バウエルが謂ふ金生産へ資本が流入した結果生じた所の他の總ての生産物の理論的價格騰貴が實際として現時に於ては極めて微々たるものであり、また金（貨幣）と商品との間の交換比率に於ける變化が從つて又現時の物價騰貴がこれによつて起り得ないことを主張しやうとする。

先づ第一に金生産への新資本投資の割合を投下勞働量及び生産物價値の兩方面より觀察する、勞働量に就てみると、全世界金生産に、百萬人の勞働者が從事したことは嘗てないが資本家的金流通の領域には尠くとも二億人の勞働者が生産に從事してゐる。今十年前に五十萬人が金生産に從事してゐたとすると、二億萬人に對する五十萬人の割合で即ち1/4％の割合で資本が移動したことになる。かゝる微々たる移動は商品生産上決して顯著な影響を持つものではない。又資本家的世界に於ける毎年世界生産物の價値は百二十四億マルクに達すると合理的推定し得る。これに對して金生産物の價値は一九一〇年に於て一億九千百萬マルク即ち前者の一・五％に達する。かく其の割合は微弱であるからして、最近十年間に於ける事情の推移はたとへこの事情が一般的に起つたにしても斷じて著しい影響を價格の上に及ぼすものではない。（上掲書一八四―一八八頁）

第二に、新たに蓄積された資本の上での金生産の割前を決定する試みによつて、同じやうな結論に達する。世界金生産の價値は一九〇一―一〇年間に毎年約九百萬マルクの增加である。金生産に於ける利潤率が平均利潤率と同じであり、生産手段は新投資と同じ步調で償却されるとすると、毎年九百萬マルクの生産物價値の增加は同じく九百萬マルクの平均的な新投資に應ずる。然して、英國の資本市場にて一九一〇―一一年にオーストラリア及アフリカの鑛山に投資せられた額は稍々これに相應じ、兩鑛山は世界の金生産の1/2以上を占めてゐるから、金生産へは毎年約千五百萬マルクに達する投資があると見積り得る。これに對して Economist, 1919. 2. 12. に依ると、世界新投資の總量は十六億九千六百萬マルクであるからして、金生産への新投資は總投資の僅に一パーセントにも達しない。

以上の如く、勞働量・生産物價値・資本發行高の孰れからしても、總資本量の一―一・五％に過ぎないのであつて、從つて金生産に起つた事情の變化が商品價格に影響するとは全然考へられない。

七

以上ヴアルガがバウエルに加へた批評は一言にして謂へば金生産の變化が物價に及ぼす影響は――考へられないことではあるが若しあるにした所で――微細なものであつて顧慮するに價しないと謂ふにある。ヴアルガのかゝる見解に對してカウツキーは前掲の樣に "Wie Dandlung der Goldproduktion und der wechselnde Character der Feuerung" 1913 に於て、を以つて反駁すると同時に金と物價との關係に就ての彼の構成的意見を附加してゐる。而して金と物價との間には確實なる關聯の存在してゐることを是認する彼の理論の根據は結局する所前掲のバウエルの所論と一致してゐる。即ち、金生産の變化が物價に及ぼす影響は單に金鑄貨の數量によつて決定せられるとなす貨幣數量說の立場からは說明せられるものではなくして、商品の價値法則をそのまゝ適應することによつてのみ決定し得る。金の價格の變動は何等他の商品のそれと區別せらるべきではない。そは其の生産に要する社會的必要勞働時間の變動の結果資本の分配の變動を通し、これ等の領域に於ける平均利潤を同一ならしめ、次で、價値を生産價格に轉化せしめるやうな需給關係を生ぜしめることによつて行はれる。金生産費の減少は以上の過程をもつて物價騰貴を永續し、利潤率を上騰せしめるからして、産金額の增大は一般に好景氣現象と一致してゐる。總て此等

めることは今新に紹介する必要はない。それで問題は彼がヴァルガの批評に對しては如何なる理論を以つて應へたかである。

前掲のやうにヴァルガに據ると、世界總生産物總價額は百貳拾四億マルクであつて金のそれは其の一・五パーセントに過ぎなかつた。故に、金生産の影響は微細であると。これに對してカウツキーは、貨幣の流通に於ける諸法則を分解することによつて、金の生産數量の變動は、單に金の生産數量とか金生産上の投資額とかが他の商品生産に於ける生産額や其の投資額との比較によつて得られる數量的關係だけの重要性を持つてゐるものではなく遙に大なるものがあることを强調してゐる。かゝる特徴の第一は何か、

それは貨幣が他の商品と異つて流通内部に固定する特質を有することである。金生産額の意義を其の産額の大きさと貨物の産額の大きさとの比較からして測定し得るものではない。金の年々の産額は其の單なる大きさによつて表示せられるよりは餘程大なる需要を生ずるものである。何となれば、商品の年々の生産額は、其の年中に市場より退いて、新しい生産物がこれに代るに反し、商品總量を流通せしめる貨幣總量は市場にとゞまり其の年の金生産額だけ増大するからである。（K. Kautsky; "High cost of living, Change in gold-production and the rise in prices. Frans. Austin Lewis. Chicago. 1915. p. 63）金の年生産額と、商品の年生産額とを比較すれば、それはヴァルガの述べてゐるやうに微少なものとなるけれども、若し、非貨幣用金を除外して、金の年増加額と商品生産の年増加額とを比較すれば、金の年産額の意義は可成重要なものとなる。彼が世界貿易より推定した世界總生産年増加額は六十億マルクなるに對し、金は約二十億即ち三三％に達する。（Ibid p. 64-65.）

第二に、商品流通速度の増加は金生産の増加の影響を擴大する。一九〇〇年以降商品の流通速度を増加せしめた一の技術的條件として鐵道其の他の運輸機關の發展を擧げる事が出來る。又、支拂手段として貨幣使用の普及もこの勢を促進した。流通の發展に伴ひ、信用制度は今世期に於いて非常に擴張せられ債務相殺作用の擴大は「商品の金流通により少量の純金が要求され、金の現存額から流通内に入るものはます〳〵尠くなる。」（Ibid p. 68）に至り金の現存量が經濟上に及ぼす影響を増大した。更に又市場の狀況は過去二〇年間に於いて著しく好轉し、増大せる金量は十分に需要を發達せしめた。商品流通の速度の増加は金生産増加の結果として起るものであつて、これに對抗して起るものではない。金生産の増大は商品流通の急速になる傾向と一致してはたらき且つこの傾向を强める。

第三に非貨幣用へ轉化されるの金の額の減少である。この事は資本主義的生産の發展の必然的結果であつて、從來非資本主義國或は半資本主義國に退藏せられた金は漸次に貨幣用金に轉化せられるに至つたこと、及び金の工藝上の使用の變化の程度の少いと謂ふやうな事情に依存してゐる。即ち、金の産額中工藝上に投せられた額の割合は一八九〇年―一九一〇年に四二・〇％―二四・六％に減少してゐる。總てこの種の事情は金生産額の影響を増大したものに外ならぬ。（Ibid. p. 69-27）

最後に銀行事業の發展は金生産の物價に及ぼす影響を擴大する。貨幣は技術的には金として銀行の金庫に固定し、經濟的には爲替手形・銀行紙幣として市場に流通する。紙幣は其の代表する貨幣額の充分なる代表者である限り、金鑄貨と同じ役目をつとめ、また實際に、金鑄貨と同じ經濟的効力を持つ、信用機構の發展はより少量の金量をしても愈〻大なる經濟的効力を發揮せしめる。他面退藏貨幣は漸次に中央銀行に集中する傾向を持つからして、金の重要性は増大せられる。（Ibid. p. 82-87）而して彼が「銀行にある貨幣が多ければ多い程、一般流通界にある貨幣は

ます〳〵多い」。と論じてゐる時貨幣と信用量との關係はフィッシャーが認めた樣に、前者により後者の正比例的關係の存在を承認しない迄も尠くともこれに積極的に反對するものではない。これに反してヴァルガやヒルファディングは其の關係の存在を全然否定せんとするものである。

カウッキーは勿論金生産方法の變化のみを物價變動の唯一の原因と見做しはしない。此の外、交通機關の發達關稅、トラスト、地代、軍費等にも其の原因を需めてゐる。乍併、彼は、金生産額の增大はそれだけ新需要の增大を意味し、從つて好景氣を約束するものであり、勞働狀態を改善するものであるに反し、經濟的獨占化に伴ふ商品の供給の制限に基づく物價騰貴は、常に勞働者の貧困化、惹起せしめる。今や金生産額の增加の傾向は漸次に下向してゐる。然るに他方、拘束經濟の强力なる發展は急足に行はれてゐるからして、後の意味に於ける物價騰貴は不可避的である。

以上のカウッキーの「物價騰貴論」を以つて此の論爭は一段落を告げた。ヴルファカ、ヒルファディングの流通價値に立脚する理論は純理論としては決して正鵠を得たものではないであらう。マルクスが「貨幣價値にして與へられてゐるならば、取引價格總額は流通手段の量を決定すると」と謂ふ場合に於ける前提條件はこれを正當に吟味し考量すべきであつて、これを不當なる「廻り道」として省却すべきではない。乍併、其の反對論者たるカッウキーに於いても或る程度認容せられてゐるやうに、金生産の增加量は漸に減少し、從つて金生産に生ずる生産方法の改善にも拘らず、資本の分配を變更せしめて一般物價を上騰せしめる如き變動を生ぜしむる機會を減殺するに至つてゐるからして、マルクスの與へてゐる前記の前提は、實際に於いて、省略して敢て不當なる結果を生ずることなきに至るのではなからうかと考へる。

ハンザ同盟に於ける中世的要素

高村象平

一

「ひと若し我に居らずば、枝の如く外に棄てられて枯る。ひとびとこれを集め火に投入れて燒くなり。」かくして、火刑を以て異端糺問に臨むことの漸く多くなり始めたと略、同じき頃、北歐を彩つた諸商業都市の同盟『獨逸ハンザ』の活躍は、當時の「自由都市の存在」と相並べて、これを「中世紀の絕頂」(1)と做しても決して過言ではないほど、目覺ましいものであつた。然しその光彩は、畢竟、封建社會の圈內に於いてのみ發揮せるもの、謂ゆる中世的なる商業都市の背景の前にのみ、その演ずべき役割を有したものに外ならなかつたのである。

このハンザ同盟が、獨逸經濟史上に於いて有する意義を明かにするに先立つて、暫くハンザ同盟自體に包藏される二種の要素――それを筆者は中世的要素と近世的要素と名付けるのであるが――に就いての概觀を與へたいと思ふ。それは筆者のハンザ研究の輪廓を、おぼろげながらも限定して、以てこの後の研究に際しての導きの絲の所在を一應示すところありたいといふ意圖より出づるものに外ならない。

吾々の誰もが、中世歐羅巴に於いて一切のものが安定してゐたといふことに就いては、恐らく一應は肯定するで